

# 魅せられて

根来 澪子

かつて、浪漫あふれる大長編をものして読者を湧かせた往年の作家たちが、年老いて、抹香臭くなり、「孤独の勧め」とか、「老年の生き方」などという説教じみたエッセイを書いているのは、大変に寂しいことである。この手の、人生の指南書はよく売れているようで、新聞広告で見られるように、次々に出版されている。

しかし人にはそれぞれの性格があり、人生の過ごし方はまさに千差万別、簡単にエッセイなどで指図するよきな問題ではないと思う。生きる指針を何かに求めたいのなら、読者はむしろ哲学、宗教書のようなものを学ぶのが手っ取り早いのではないかと思っている。50歳そこそこで亡くなった哲学者、池田晶子は哲学的な見地から興味深く人生論を書いているので私はお勧めだと思っている。老大家は書くエネルギーが枯渇して短いエッセイのなかに逃避しているように思えてならない。谷崎潤一郎のように、最晩年になるまで、壮大な物語を読者に与えてくれるようであってほしいと願っている。

る。

しかし、我々読者側にとっても、高齢になるにしたがって長編を読むのはだんだんおっくうになってきているのも事実だ。本の厚みを見ただけで敬遠したくなる。これもやはり身体的老化によるエネルギー不足のせいなのだろう。若いころは、ドストエフスキーやトルストイの、長つたらしい登場人物の名前が難なく頭に入ったし、フランスの大河小説も夜を徹してわくわくしながら読んだ。あの頃の読書欲はどこへ行ったのだろう。老化に伴って書くほうも、読むほうも次第に先細りになり、残り火を掻き立ててみても再び燃え上がらせるのには格段の努力が必要なのである。

そんなことを思い、一年を顧みてわが行く末の儂いことを嘆いて楽しめない日々を過ごしていた今年、2020年の暮れ、ふと、7月に、老衰のため、100歳で亡くなった作家、久木綾子（あやこ）のことが頭に浮かんだ。2008年、89歳という老齢で、新進作家としてデビューした女流作家のことである。デビュー作は大長編『見残しの塔——周防の国五重塔縁起』という堅苦しい題名である。当時、慢性的な不眠症になやまされていた私は、ベッドサイドのテーブルの上にラジオをおいて、終夜、うつらうつらしながら深夜放送を聞く

のが習慣になっていた。明け方の4時、「心の時代」という、各分野で活躍している人たちへのインタビュー番組があり、(現在は「明日への言葉」と改題されている)2008年、3月のその夜も漫然と聴いていたのだが、インタビューは誰だったか覚えていないが、答弁する久木綾子という89歳の新人作家の語り口は、物静かで、上品で、大変に好感が持てる人柄がにじみ出て耳に心地よく、内容はわからないまま寝入ってしまった。気になったので、後日ネットで調べて知ったのだが、放送内容の話題は彼女が、山口県にある瑠璃光寺五重塔を題材にして書いた自身の小説の解説であった。比較



的地味な宣伝であった。比較が、高齢新人作家ということでその時すでにマスコミでも話題になっていたようであった

が、私は初耳であった。検索の結果は次のようである。久木綾子は1919年(大正8年)、東京に生まれた。旧制高女、専門学校卒、戦時中松竹大船の報道記者となり、また同じころ、三笠書房の同人誌『霜月会』のメンバーになって作家を志した時期もあったが、終戦の年、山口県人の池田正と結婚をして以後40年間、専業主婦として過ごした。平成元年、夫に先立たれて一人になったとき、すでに70歳に近い年齢だったが、再び文学の道を志す。

彼女はその後、山口県内を旅して、山口市郊外、香山(こうざん)公園の中に立つ国宝、「瑠璃光寺五重塔」に出会う。この塔は、室町幕府第3代將軍足利義満との戦いに敗れた大内義弘の菩提を弔うために、弟の盛見(もりはる)が計画したが、彼も戦死して、その後、紆余曲折を経て1442年に完成されたものであるという。間近に接して美しさに深く感動した彼女は、塔を建立した名もない人々の人生に想いを馳せた。塔の傍にある資料館には大正4年、国による大々的な塔の解体再建工事の際、五重北隅の側柱(かわはしら)から墨字で書かれた巻斗(まきと)。「肘木の上にある小さな斗形」が発見され、それが展示してあった。巻斗には、建立された年代(嘉吉二年)と時間(むま時は昼

の11時から13時の間)、ふでぬしの年齢(式拾七)。花押だけで個人名はなく次のように書いてあった。

「嘉吉二年二月六日、このふでぬし式拾七

年みずのえいぬむま時

きたのすま(隅)」

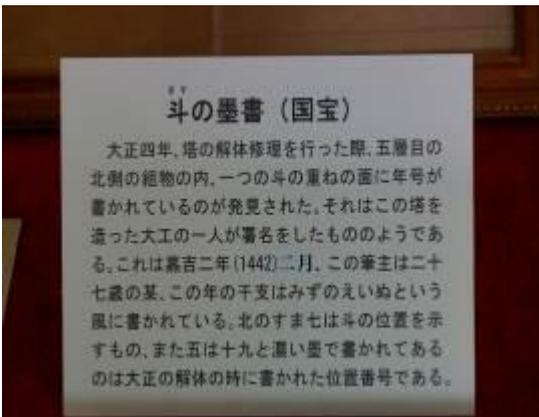
すなわち、応仁時代、塔を建立した27歳の「ふでぬし」である番匠(大工)が残した墨字、花押を記してあるだけなので誰の筆になるかは不明だが、この一片の巻斗から、一人の青年大工が久木綾子の心象風景のなかに、左右近(さうちか)という個人として創造され、生々しい血肉を持った小説の主人公として現れ、立ち上がったのである。「巻斗を見た時からすべては始まった」と作者は言っている。

この番匠は、どこの誰なのだろう。27歳の若者は、自分の名前を明かすことなく、ひそかに巻斗に書き残した文字が五百年余も時を経た現代、大勢の目目に晒され、塔建立の時期を証明する貴重な資料として国宝



に決まったことを気恥ずかしく思っているのではないかと、作者は逢うことのかなわない、いにしえの青年大工の姿を愛しんでいるようだ。その彼にたいする愛しみが、作者の情熱を掻き立て、彼を中心に、塔を建立した人たちの壮大な物語がふつふつと広がっていったのである。

70歳にして作品化する決心をして猛烈な勢いで勉強に取りくむ。「日本史論文の書き方」を学び、中世史の講義を受けるために月に一度、東京から姫路まで5年間通いつめる。建築や文化財の専門家を訪ねて、塔の建築様式などを学んだ。主人公が宮大工のため、彼女自ら大工の棟梁の中に入り、道具の使い方、釘一本も使わず、500年



余の風雪に耐えている木造の美しさを表現する技術を学ぶために、取材に賭けた歳月は14年、執筆に4年、18年の歳月を費やして2008年、『見残しの塔―周防の国五重塔縁起』が完成し、新宿書房から出版されて、89歳の新人作家が誕生したのである。

更に、80代になってからパソコンのワードの使い方を学んだ。登場人物が歩いた道を歩き、その空気を吸って自分自身で実感したことを書くために、宮崎県や滋賀県に至るまで自分の足で歩いたという。

歴史ロマン360ページに及ぶ大作、(定価2520円。新宿書房)を時代考証に万全を期し18年の歳月をかけ、89歳で完成させたその情熱、執念は並大抵のものではないと思う。早速書店に足を運び、購入して一気に読んだ。あとがきに、この作品を書くに至った経緯を丁寧にしている。2ページにわたる膨大な参考文献。平成16年4月から19年まで、隔月発行の『文芸山口』に、「諏訪の国 五重塔縁起」という題で、年に3回、もしくは4回、足掛け4年、11回にわたって連載したものを加筆、補正したものであるという。各専門分野の学者、館長、識者との出会いがあつて幸運だったとも述べている。その人数も半端ではない。

『見残しの塔―周防の国五重塔縁起』は次のよう

な美しい文章で始まる。

「人は流転し、消え失せ、迹に塔が残った。

塔の名前を「瑠璃光寺五重塔」という。室町中期、寺は「香積寺」と号した。守護大名大内氏一族興亡の歴史を秘めた国宝の塔である。歳月が塔の朱を洗い流し、素木に還し、古色を加えたが、美形は変わらない。塔は今日も中空にのびのびと五枚の翼を重ね、上昇の姿勢を保ち続けている。」

前にも述べたように、この作品は、大内盛見の命により周防の番匠(宮大工)である棟梁の清原盛光を中心に塔を建てた人々の群集劇ではあるが、ドキュメンタリー風ではなくあくまでも「左右近」という架空の人物を配した、壮大なストーリーを持つ歴史小説である。細部は丹念に調べ上げた事実に基づいていて、まさに偉大な虚構は細部の真実から成り立つことを実証している。九州椎葉村から、宮大工の修行に出てきた若者、左右近と、若狭から逃避してきた姉妹を重ねて、それぞれが周防に建立される五重塔に向かって見えないうちに引かれていくように出会う構成は多くの登場人物が絡み、フィクションらしい幅の広さを見せているし、文章は硬質で、凜とした気品がありながら読みやすい。膨大な材料、斗(ます)の数、1800・側柱

60本、四天柱20本：垂本2200本余。これらを基礎から順に塔を組み立てていくのだが、塔建立の完成にいたる綿密な描写には驚くばかりである。その合間にロマンに満ちた挿話をいれているので飽きることがない。歴史小説の楽しみはその時代の音を聞き、その時代に生きた人たちの息遣いに触れることである。登場人物の一人、恵海僧に次のように語らせている。

「大工たちは、神の手と仏の慈悲と忍耐を持っている。でなければ、こんなに人の心を打つ塔堂伽藍は立ち上がらぬ」。作者自身も述べている「あのバランスのいい塔をみたら、だれがこの塔を作ったんだろうと思いますよ」と。何度も繰り返す。それまで家庭の主婦であった80代の作者がよくここまで綿密に調査したものと驚いてしまう。塔の材料となるまでの木は、森から伐採され、天日で乾燥した後、3年から5年水につけることによって、千年もの長きにわたって耐えられる強靱なものになるという。現場での型板起こしからははじまり、木取り、墨付けなど具体的に工事は描写される。複雑極まる現場の工程をへて完成に向かうのだが、丁寧な言葉遣いで読者をひきつけていく描写力があり、納得し、目の前に情景が広がるように物語上の工夫もしているのだ。練りに練った場面、それは作

者の中で幾度となく反芻されたものだからだろう。私達は一人一人の登場人物に寄り添い、彼らの運命と足並みをそろえるように、共に歩き、共に立ち止まる。作中、「誰のために塔を建てるのか」と聞かれて左右近は答える。

「塔の為です。塔が満足してくれるように、それだけを考えて造っています」。40年間、安穩として専業主婦の座にいたわけではないのだ。18年間の歳月をかけた力の、構想力の成果がそこにある。しかも全く作者の年齢を感じさせない描写のみずみずしさ、80代の女性にかくまでも創作意欲と情熱をかきたてた瑠璃光寺五重塔に対する興味が津々とわいてきた。京都や奈良の五重塔は見学する機会に恵まれ、足を運んだが、山口県の国宝の塔を是非この目で視たいという思いが強くなっていった。



平成29年秋、加齢による体調の衰退が、もはやこれ以上待ってられない「今でしょ」の思いで、山口市の国宝瑠璃光寺五重塔の見学が旅程に組み込まれているツアーに参加した。早朝の飛行機便だったので、前日羽田のホテルに一泊することになった。お定まりの萩、津和野を経ての2泊3日のスケジュールで、山口市については秋の夕暮れが迫る時刻となっていた。駐車場でバスを降り、瑠璃光寺の境内に入る。なんと、境内には柵もなく自由に入入りできるのだ。参観料は無料。瑠璃光寺五重塔はすぐ目の前にあった。あたりはずでに夕闇が立ち込める気配がある。ガイドによれば日没間際が一番美しいとのこと。夜はライトアップをしているようなので、むしろ、もう少し待ったほうがよかったのかもしれない。日本三大名塔（京都醍醐寺五重塔、奈良法隆寺五重塔）の一つとされている国宝だ。

瑠璃光寺五重塔の第一印象は、どっしりとか、豪華だとかいうイメージよりも、全体が華奢で繊細でスマートだということ。人間でいえば手足が長く胴がほっそりしていること、私の大好きなフィギュアスケートのアスリートが氷上を舞う姿を連想した。まさに美形だ。どんな技術の粋を尽くしているのか、屋根の反り

が大きくて優美である。資料によれば、「相輪の先端まで31、2メートル、各層軒が広く張り出し檜皮葺きの屋根の勾配はゆるい。塔は上に行くほど間を締め、塔の胴を細く見せている」とある。背景に木立、前面に池を配し、まさに一幅の名画である。35回も訪ねるほどこの塔を恋し、情熱を燃やした久木綾子という女性が天空に広がって五重の屋根を覆った。——あなたは会うことの叶わない500余年前の番匠、「巻斗」に、自分の名前を記すことなく、建立の年代、時間だけを書き残した青年大工への熱い想いを18年の歳月をかけて名作に残した。「左右近」と名付けられた彼はあなたから肉体を与えられ、大内一族の文化を後世に残し、魅力的な職人としてあなたの期待に応えた。あなたの恋は成就した——。私の中の「左右近」は答える。「わたしは取るに足りない一職人です。破壊と再生を繰り返し、武士が世のすべ



てを取り仕切る戦乱の世にあつて、せめて主君の文化を誇り、慰めるよすがとなれば、の一念で鑿をふるいました。」

五重の塔は美術的な見地だけでなく、遺骨を祀っているという宗教的にも大きな意味を持つて、見る人に畏敬の念を抱かせる。宗教は靈魂だけの世界ではなく、それを内蔵する建築物も人の心をとらえなければなら



ない。神社仏閣の厳かな佇まいは、建物と霊が一体となつて存在するからだろう。塔は「この世とあの世の堺に立つ結果に見えた」と作者も書いている。結果とは由緒ある古寺を拝観しているとき、「この先立ち入り禁止」という意味で設置されている木柵をいう。結果を超えることはできないが、こちらから想像することはできる。解体修理のとき、巻斗が発見され、それによつて正確な建立時期が判明し、国宝に指定されるゆえんになったということを資料館で私自分の目で確かめ、改めて感慨を新たにしたい。

いつの時代でも、歴史的建築物の建立を計画し、指示した権力者の名前は歴史に刻まれ、後世に残るが、労力を提供して実際に仕事に携わつた無名の、多数の職人たちは彼ら以上の存在であるはずなのに、表に出ないことが多い。そこに着眼した作者の暖かい目が、いたるところに感じられる。彼女が、長い人生を乗り越えてきたからこそ見えるものがあるとおもう。あとがきに「瑠璃光寺五重塔に出会い、人生を変えた一瞬が、その後の十数年を決めた」と書いている。私は最初に本ありきで、触発されて実際に五重塔を見たのだが、今更のように何千という部品の数、それを削り、組み立てていく絶妙の技、木造建築の最高の技術だろ

うと思うし、それを次の世代に伝えていく職人たちにたいして畏敬の念を持つのである。これは日本のみならず、世界遺産といわれる各国の建築物を見た時と同じ感慨にうたれる。

熱中する対象、そして集中力を持ち続けること、背筋をのばして、正座をして読みたくなるような小説にはそうそう巡り合えるものではない。NHKの番組ではないが「ポーっとしてるんじやねえよ」とチコチヤンに叱られそうである。

久木綾子はその2年後、2010年、『禊の塔 羽黒山五重塔仄聞』を上梓し、本年2020年7月、100歳の生涯を閉じた。

「美残し」とは地元で通用している字名であり、「五重塔はその姿を視た人間にとっては(美残しの塔)だが、巡り合えなかった者にとつてはこの世に想いを残す(見残しの塔)である」と作者は説明している。

なお、89歳で新人作家というのも驚きだが、若干14歳で作家デビューした「鈴木るりか」の存在を最近知った。鈴木るりかとは2003年東京生まれ、小学4年、5年、6年と3年連続で小学館主催の『12歳の文学賞』に入賞、2017年14歳の誕生日に『さ

よなら田中さん』を発売し、10万部をうりあげた。好きな作家は志賀直哉と吉村昭だそうで、将来の大家を予見される。「ストーリーはいつも勝手に沸き上がり、キャラクターが勝手にしゃべりだす」とのこと。17歳の現在、コロナ禍の最近のエッセイ風のものを読んだが、着眼点がしっかりしていて、頼もしい。才能の開花は年齢にはさほど関係がないようだ。もう〇〇歳だからと落ち込む必要もない。と思いたい。

2020年12月